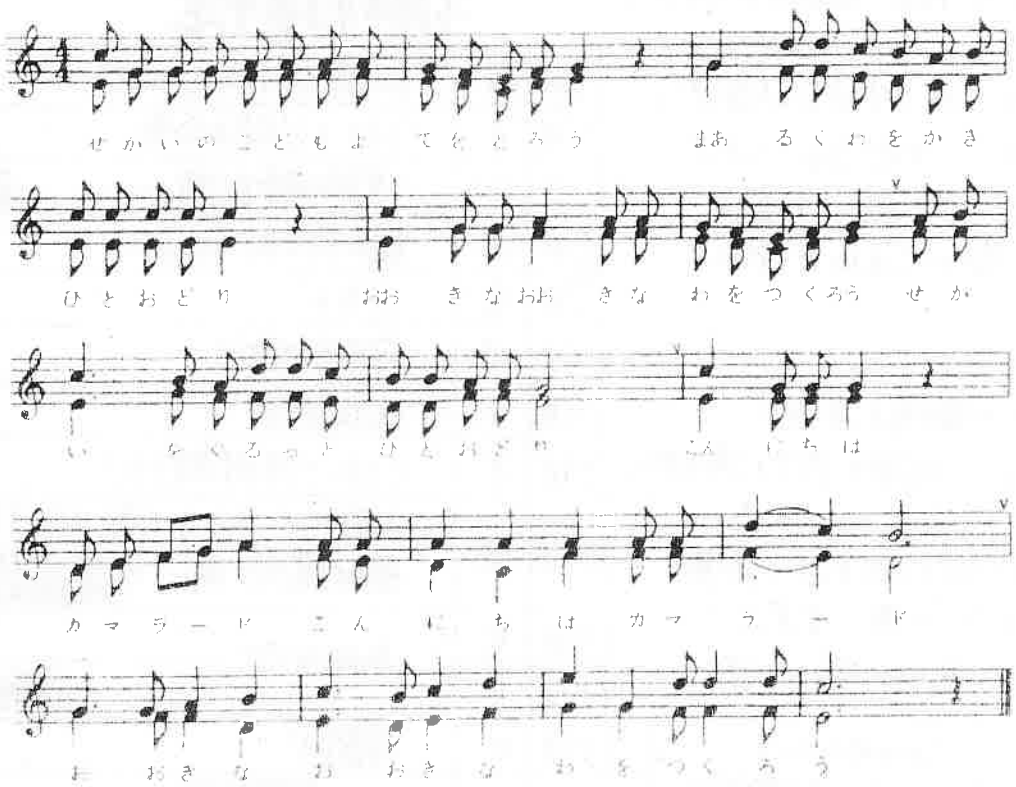
世界の子供よ

木村　次郎　詞
丸山　亜季　曲



世界の子供よ

世界の子どもよ　手をとろう
まあるく輪をかき　ひとおどり
大きな大きな　輪をつくろう
世界をぐるっと　ひとおどり
　こんにちは　カマラード
　こんにちは　カマラード
大きな大きな　輪をつくろう

カマラード　エスペラント語で仲間。

「どんな子どもに育てたいですか？」

長谷川摂子

「どんな子どもに育てたいですか？」と聞かれると、幼児をもつたいていの若いお母さんは「思いやりのある子」とか「友達を大切にする子」という答えをする。私はその答えを聞くたびにため息が出る。そんな目標は幼児には二の次、三の次だ。それ以前に子どもが毎日を幸せに過ごしているか、生き生きと、遊び、楽しみ、この世に生まれてきたことを本当に喜んでいるか、が大切なのだ。それこそ子どもの人間としての基本的要求。そこが満たされない限り、子どもは自分の存在に自信がない。情緒不安定になり、大人に支えを求めていつも不安で集中力がなくなる。自分自身が不安で仕方がないとき、他人に思いやりなどもてるわけがない。幼児のうちは「自分自身に満足している子」が目標でなければならないと思う。子どもに愛情を注ぐということは、人間としての自分に自信を持たせることだ。それこそが幼児教育の究極の目標ではないだろうか。

その人間の芯になるプライドは競争や比較では育たない。「あなたは世界でたった一人のかけがえのない存在。あなたがいることで周囲の私たちは幸せになれる」という大人の無償の愛情を子どもに絶えず感じさせなければそれは育たない。そのことが後で子どもにも社会にも大きな収穫になるだろう。自分がこの世界にとって良い存在であると心から信じている子どもは人をいじめたりしない。ましてや自分を傷つけたり、親や他人を傷つけたりしない。私たちは、子どもの成績や学歴、その他で他人を抜くことを要求するのではなく、その子がかけがえのないその子であることに誇りを持てる親になろう。そうでなければ子どもは選別され、格差をつけられ、まるで出荷される果物のようではないか。しかし、実際はそのことが今の社会不安の原因の大部分を占めていると思えてならない。何がともあれ、毎日を充実した楽しい遊びで満たし、人生への生きる喜びを子どもに予感させること、それが親や保護者の義務といってもいいと思う。（後略）